



SANJO ROTARY CLUB

三条ロータリークラブ

2009.1.21 (No.2533) 週報 No.26

第2560地区ガバナー／馬場信彦
会長／中村和彦
会長エレクト／菊池 渉 (クラブ奉仕A)
副会長／樺山 仁 (クラブ奉仕B)
幹事／石月良典
S A A／明田川賢一
会計／杉山幸英

例会日／毎週水曜日12:30～
例会場及び事務局／
三条市旭町2-5-10 三条信用金庫本店
例会場／TEL 34-3311
事務局／TEL 35-3477 FAX 32-7095

E-mail : sanjo-rc@cpost.plala.or.jp
http://www.soho-net.ne.jp/~rotary/
(“は”shiftを押しながら“へ”のキーを
押してください)

- 本日の出席会員数:59名中32名
- 先々週出席率:85.45%

【ゲスト】

・パストガバナー 横山芳郎 様

【先週のメイクアップ】

【1.19】三条南RCへ

- ・菊池 渉さん、五十嵐晋三さん
- ・小越憲泰さん、丸山行彦さん
- ・加藤紋次郎さん、渡邊喜彦さん
- ・西川文夫さん

【1.19】新井RCへ

- ・加藤紋次郎さん

【1.20】三条北RCへ

- ・菊池 渉さん、藤田紘一さん
- ・杉山幸英さん、西川文夫さん
- ・渡邊喜彦さん、斎藤弘文さん
- ・丸山行彦さん、加藤紋次郎さん
- ・山田富義さん、五十嵐浩さん



昭和佐助椿

4 R C 合同例会



三条北RC会長 石川友意 様

三条北クラブ石川でございます。

本日は4RC合同例会ということで、こうして市内のたくさんのロータリアンの皆様よりご出席いただきましてありがとうございます。

諸先輩クラブの皆様方が多数いらっしゃる中、大変僥越でございますが、今年度幹事クラブということで、少しご挨拶をさせていただきます。

今月はロータリーをよりよく理解を深める為のロータリー理解月間となっております。本日は、南クラブの坪井パスト会長さんからお口添えをいただき、横山パストガバナーをお招きしてご講話をいただくことになりました。横山パストガバナーにおかれましては、お忙しい所三条市内ロータリアンの為にお越しいいただき、誠にありがとうございます。横山先生のご紹介につきましては、お手元にプロフィールがございますので略させていただきますが、三条にとりましては、平成16年の未曾有の大水害のあった年度のガバナーでいらっしゃいました。同じ年に中越地震もあり、大変難儀をされたガバナー



「夢をかたちに」

2008～2009年度国際ロータリーのテーマ

でいらっしやいます。また、その年度のガバナー公式訪問は、当時3RC合同で行われたことを記憶しております。

本日は、それ以来の合同例会で大変久し振りでございます。

今年度馬場ガバナーより「ロータリーで人生を高めよう」というメッセージをいただいております。ロータリーの理解を更に深め、また、少しでも人生を高めるためにも、本日の講話で勉強させていただきたいと思っております。

4クラブ合同例会講演会 「ロータリー温泉会員の思い」



バストガバナー 横山芳郎 様

本日は4クラブ合同例会にお呼びいただき、光栄にぞんじます。三条には藤田、中条、馬場の3ガバナーがおられ、新潟市の4人とくらべ、ロータリアンの人数割りにしたら、三条の方がすごい豪華メンバーですから、2560地区のトップクラスのロータリー地域だと思ひ、その例会にお呼びいただきましたのは、身のひきしまる思いでございます。

本日は皆様がどういう思いでロータリーライフを送っておられるか、いろいろな考えで楽しくお過ごしと思いますが、人それぞれ、色々という所がいいのであって、ロータリーはこうでなければいかんということはないのでございます。Rは政治団体〔独裁国家〕でもなく、宗教団体〔絶対者〕でもなく、世の人々によかれと尽くす共同体でありますから、こうでなければいかんということはないのであります。

それで私のロータリー観をお話して、そんな考えもあるのかなとお思ひいただければありがたいのであります。表題にEnjoy Rotaryと掲げましたが、それは10年ほど前の国際ロータリーのテーマにもありましたが、その考えが基本だと思っております。ストックに奉仕、奉仕と言ってもいいのですが、そうも言わないところが受けるころだと思ひます。

ロータリーには初期シカゴクラブのころから、脱力系趣味人派とそれに対する積極系仕事人派との葛藤が常にあり、いつも論争の種になっていました。

前者は米山梅吉さんが提言したといわれる「ロータリーは人間道場だ」というクラブ奉仕の考えこそがすぐれものだとすることで、これは藤田説量バストガバナーから教わりました。個人奉仕派というべきかもしれません。立派なクラブに属して、日々洗

脳を受けているうちに、奉仕、ほうしなど、つくつくほうしのように言われなくても、そのうち世のため人のため、家族のために奉仕しようという心構えが自然にできてくるから不思議です。

積極派とはいいますと、RI〔国際ロータリー〕の会に出てみますと、奉仕のかたまりのような方がおられます。いつもすごいなあと感じていますが、そういう方は「ロータリー原理主義」ともいうべき方で、イスラム原理主義のように、ロータリー発展のためなら、身命を賭して働くというか、ロータリー拡大の覇権主義をいのちにしておられる方です。シカゴクラブで、ドナルド・カーターらが主張した、ロータリー発展のためには、クラブ内の相互利権主義にこだわっているのは、ロータリークラブの発展はないということ。社会奉仕・国際奉仕こそRの発展、拡大には大切だと主張してロータリーを改革したことに端を発しています。シカゴクラブのこれらの長年の両派の葛藤を記載したGolden Strandという本がありますが、strandというのは縄という意味で、細いstringでなく、両派が縄をなうように、葛藤しながら金色のロータリーという結果が得られたということでしょうが、今でもまだこの命題については、決着がつかないまま、今日の私のようにまた蒸し返す人がいるわけです。

またロータリー源流主義というのもありまして、ポールハリスの源流に則って、正しいロータリーの本道を求めて、ロータリールネッサンスをいつも心がけておられる方々で、私はいつも尊敬しています。

それでは私はいかがと申しますと、ロータリー中流主義で、泡立つ源流の激しさはないのですが、広い川の中流で、川辺のロータリー温泉にとっぷりと首まで漬かって「ロータリーは楽しい、たのしい」といっているEnjoy Rotaryの人種です。皆様も自分のクラブは世界一だと思っておられると思いますが、私は「新潟クラブは世界一」といって「RIは旗振るな、地区は旗たため」と覇権主義に対抗したり、「四大奉仕のうち、クラブ奉仕と職業奉仕で自己の人格を磨くのが基本で、社会、国際奉仕はその次の次元」などといって、Club Leadership Plan を横取りしているような変な自己的なロータリアンになってしまいました。

現在の国際ロータリーは、拡大・増強主義で、グローバル化をはかっています。勿論、これは多少の疑問はありますが、立派な考えです。しかし、その実行の可否をめぐって初期のシカゴクラブ内には親睦派と奉仕派の論争が起きました。ロータリーの発展が増強、拡大にあるという、いわば事業拡大が第一という当時の資本主義の向かうところと一致したのでしょうか。

今ではそのために、世界的な奉仕団体としてロータリーは発展してきました。RIの役員の方は、ロータリー財団のことをロータリーの営業部と呼びますが、そんな考えに変わってきています。後で述べます佐藤千寿氏はロータリーは「奉仕団体」ではなく「奉仕人の団体」なんだと申されます。

シカゴクラブの初期、クラブ入会に誘われたロナルド・カーターは個人的な利権主義のRには入らないと決めていました。クラブで討論の結果、ロータリーを拡大するには奉仕活動が不可欠であるという結果が、ロータリーが拡大した原因ですから、これはよかったです。何かいいことのために拡大運動する覇権主義と、心の問題としての奉仕運動との葛藤は、今も私の心を不安定にして、善悪の軍配をどちらかに上げることはできません。二者択一も難しいし、両面価値Bivalencyというものは選択に悩むものです。

今では若い人も平和主義という桎梏を離れて、個人的に自由に平和を愛する傾向に変わってきたと申します。「主義なしの平和願望」が世の中に浸透してきたといえます。ロータリーも先進国では身近な、個人的な奉仕願望が台頭してきたのではないのでしょうか。少なくとも職業分類ロータリーというというようなガチガチな人種にはなりたくありません。

二者択一に悩んでいると申しましたが、好きなロータリーが発展するためにはどうすればよいか、いつも考えております。宗教や独裁国家のように、絶対者を信じて従っている人には悩みはないでしょう。しかし共同体にはいろいろな考えの人がいて、たくさんの方角性があります。何も考えずに、ただRI会長の方針に従っているのはよくないと思います。自分の信ずる奉仕の理念によって、そのことを実践するためにRIや地区を利用してやろうというのがよいと思います。ロータリーの基本は自分の精神陶冶であることが大切だと思えます。

次に述べますことは、私の尊敬しております佐藤千寿氏という東京東ロータリー出身のバストガバナーの言葉ですが、惜しくも先年亡くなられました。その最後の遺稿からの引用です。ロータリーの現状についていつも卓見を述べられていました。

ロータリーの基本はクラブであり、個人であるということをいつも言われていました。遺稿の題名は「他人〔ひと〕の金で奉仕をするという虚構」というものですが、奉仕はあくまでも個人ですべきという教訓です。

ところがロータリーの奉仕が個人奉仕ではなく団体奉仕に傾斜してくるに従ってどんどん必要資金が

増加してゆく。そうすると、今度は民主主義だからといって、全会員に同等に人数に応じて均等に負荷がかかってくる。そうして遂にはそれぞれの活動に従事する役職者の労に報いる費用というのまで発生するようになった。要するに顔の見えない他人の金で奉仕するということです。その結果、安易に役職者の数が増やされてゆく、ということになるのである。役職という格好をつけた肩書きのばら撒きである。ロータリーでは会員が減少しても逆に地区の役職者とその労に報いる補助金が増えてゆく。民間の会社では考えられないことです。然しR.Iという本山がリーダーシッププランとか称してこれを奨励しているのだから、決してガバナーの罪ではない。R.Iはこれで会員増強が出来ると考えているのだろうが、寧ろ事態は逆の方向に行くのではないかと思われる。

Keep Rotary Simpleのテーマを掲げたのは1956～57年度RI会長イタリア出身のGianPaoloであった。1993～94年のスイス出身のロバートバース会長は；「私は本年にも新しいプロジェクトは提唱しない」、「今やロータリーはあまりにも情報が多すぎる。言論も多すぎる。活動のプロジェクトも多すぎる……それでいて逆に成果はあまりにも少なすぎる……」と破天荒なメッセージを送ってきた。ラング会長とバース会長、二人は何れもヨーロッパ人で、このあたりに米欧その精神風土の違いが見えて大変興味深い。

然し経済大国アメリカの傘下に居る日本では、ロータリーもまたエバンストン総本山の傘の下で安易な選を選びたがるだろう。今アメリカは政治、経済の世界で第一等国を去ろうとしています。今後はロータリーとアメリカの立場は微妙となりました。

人間の進化にしても、突然変異でDNAが変わり、ある変化は生存に不適であるとして、個体は死滅し、他のものは進化発展することになり、一つの集合体のなかに、いろいろな変異が起きて競合するからその集合体は進化するわけで、変異の起こらない集合体の運命は、平穏でありながら変化に弱く、ついには適合不能となり、消滅することになります。

ロータリー創始後100年を経て、社会構造も変化し、事業や職業の世界が激変して、社会に対する意識が変わってきたのに、ロータリーに対する知識を持たず、ロータリーの習慣だけで活動している会員がかなりおられるということは寂しいことです。ロータリー活動は自発的で自覚をもって行われるべきで、そのためには各自がMy Rotaryの概念をしつかり持つことが大切だと考えて、いろいろな例を挙げてみました。また職業奉仕の職業の多様性がロータリーの存続には大事なのに、人数にこだわって多様性を抑える方

向に改革しています。

そのためにRIはロータリー・リーダーシップ・研究会 (Rotary Leadership Institute=R.L.I) を作って、会員の自覚を促しています。詳細は「友」の今年の12月号の横組みのページにでています。

「ロータリーの友」今年の9月号には、RIが私ども日本のロータリアンにとって奉仕の実践を示す決議と考えられておりました決議23-34を、世情に合わなくなったという理由で、歴史的文献として保存するという動議がRIから提出され、日本から選出された2人のRI理事が、日本のロータリアンにとっては大事な決議だから、なんとか残せないかと運動した経緯が述べられておりました。その結果、その決議23-34の文面(社会奉仕活動にたいする方針)は手続き要覧の奉仕の項に残すことになったと報告されています。

決議23-34とは1923年、セントルイスの国際会議の際の34番目の決議ということで、スライドのように、奉仕の理念の発表と、クラブの拒否権についての記述があり、RIの覇権主義にとっては煙たい存在だったに違いありません。

決議23-34の存在は是か非かということはこの際深く考えてみる必要がありそうです。

ここで少しロータリーのことを離れて、私は職業分類内科医ですから、人間の身体構造と社会という問題について考えてみたいと思います。

今、人間社会は共生が大切と教えられています。社会格差はなくなければならないともいわれております。平等主義が世の通念です。しかし生物界では能力のあるもの、ないものもそれぞれの役割があり、身体の大きいものの方が例えば象などが一般に長命といわれています。またDNAの構造によっていろんな病気が人それぞれに起きて、早死する人、生活習慣に無頓着の人でも長生きして、まったく不平等です。この不平等をなくすために、医者は一所懸命に努力しているのですが、なかなかうまくゆきません。

自然界では、共生を犠牲にして、はじめて生き延びてゆくものもあるのです。共産主義は経済的の平等をたてまえにしましたが、結局うまくゆきませんでした。現在、資本主義が私どもの生活の基本になっていますが、実利主義のために人間が本来もっている自由を売ってお金にして、それで生活し蓄財するのが理想のように思っている人もいます。

ヨーロッパのいろいろな都市をみても、城塞都市として周囲は城郭に囲まれ、古代の人間は互いに攻めあって、覇権争奪に明け暮れし、覇者は都市の富

を手に入れ人間を奴隷として使役して自国の富の増強をはかっていたことが伺えます。古代の人間は丁度、肉食動物のように他を侵食して、それが当たり前のように思っていたに違いありません。ヨーロッパにはまた城塞教会というのもありまして、お城のような教会を作り、異教徒が攻め込んできたときには、信者を城のなかに入れて敵と戦い、信教の自由と信者の生命を守ったということもあります。この闘争に敗れた地方の教会は、戦争が再び始められないように、木造だけの教会創設が許されて、現在でも木造教会という優雅な美しい建造物が世界遺産として残されています。

その勝ち組優位という心底が現代にも残っており、人間の自由のためには、何か大きいことはいいことだ、資本の増強は人を豊かにするから、懸命に仕事に励むことはいいことだといって刻苦勉励を奨励することになります。これが悪い意味でのグローバル化となり、競争に勝つものがすごいということになり、これで世界を一つのものに染めようとしています。産業発展のためには国境は不要、発展拡大した企業は、役に立たぬ仕事や従業員は切り捨てられ、格差に痛めつけられた青年らは、心の鬱積から社会の変革をもくろみ、戦争を望むようになります。拡大した貧困や格差にたいして遂にはロータリーの奉仕と援助が必要という筋書きになりましょう。

人間の歴史は、何億年も前から、食べ物を求めて権力争いをして殺しあい、歴史時代になっても、権力闘争に余念がなかった事実は城壁都市とかの例でも理解されます。侵略主義とか軍国主義は100年ほど前までは当然としてみとめられていたのです。商売に利を求めずというロータリー精神と同様に、侵略の利を求めずというロータリーの仲良し主義(国際協調)も大切と思います。古くからある商売の利と侵略の利を否定したことは人間の道徳律の確立にロータリーが関与していることはすばらしいことだと思います。

そこでロータリーとは何をするとところかと申しますと、いろいろに言われています。ロータリーの綱領を読んでも、日本語訳が回りくどくて、真意が伝わってきません。いまの人がほとんど使わない綱領という言葉は、英語のObjectで、平たく言えば目的ということです。私は「世界中の人が、みんな人種や宗教、貧富の差別なく、望んだ教育が受けられ、健康で楽しい人間生活をおくり、戦争や争いもなく、仲良く暮らしてゆけるように、自分の職業を通じた奉仕によって実現を目指す共同体」というように解しています。簡単にいえば、「みんな楽しく元気で、仲良くいたしましょう」ということです。

前述のように人間は有史以来、自分の利益のため、相手と殺しあう歴史をくりかえしてきました。人間は生きるために他の動植物の生命を奪う生活をくりかえしてきました。こんなことを自然界の常道として、認めてきました。仏教では殺傷を禁じているものもありますが、それでは生きてゆけません。

ところが少し救いがありまして、自然界には共生という現象がみられ、互いに殺しあわずに共に生活して互いに利益をえているものもあるのです。大きい動物にはりついて、おこぼれを戴く小判鮫とか、河馬の背中にとまって皮膚の小虫をとったり、歯の滓をたべたりする小鳥もあるといひます。身体の中に入って共生する例では、人の常在性腸内細菌などが、人体内では合成できないビタミンなどを作って宿主に供給しているなどが挙げられます。

このように自然界は弱肉強食の連鎖のみでなく、共生によって新しい生き方を創生しているものもおります。

私はロータリーがいつも身近に感じられなければならないと考えています。身近なこととは世界的に発展したグローバルなロータリーのことを指すのではなく、もっとイージーなMy Rotaryを考えたいということです。

前回の不況で日本や先進国のクラブ会員数が激減しましたが、それをあるラインで止めたのは、クラブに30-50%おられるロータリー温泉に漬かっているような普通の会員がアンカー（錨）になったためといわれています。不況などの社会状態に影響されず、ロータリーに碇をおろしたようにしっかりとした会員であったことが証明されました。ロータリーにとってこの温泉会員は大切な方々として見直されました。こんな話をアグレッシブの会員にしますと、ノンポリでバカみたいという表現になりましょう。しかし人間の心情を無視して共同体の発展はありません。会員減少は100周年を経たロータリーに一種の構

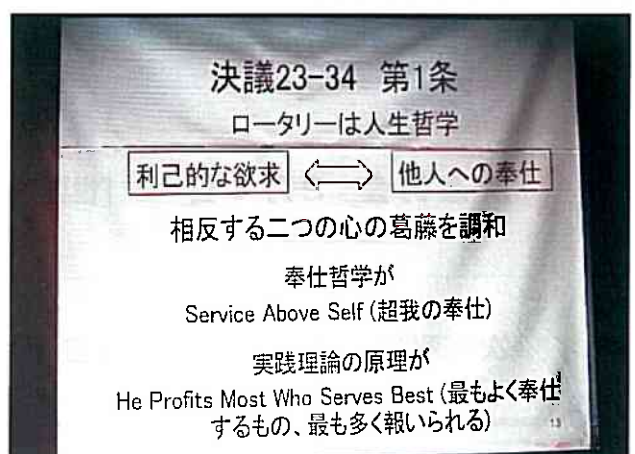
造疲労がおきてきているとも考えられます。その大きい原因の一つに会員にとってロータリーが遠くにいてしまったという感じを持っている人が先進国の会員には多くなったということです。反対に発展途上国の会員は、昔の日本がそうであったように「それやれ、あれやれ」と増強、拡大路線に力が入って、今はバランスがとれています。しかし人間の脳の大きさからしますと、仕事をするのに互いにコミュニケーションのとれる人数は100人以下とされており、それ以上になると、新潟クラブのように1年たっても名前が思い出せない会員が増えてゆきます。

自分の家族への情をロータリー家族へ、ついで自分の地域の知人、ついで自国から外国の人間家族（Human Family）としてボランティア運動を展開すれば、それはロータリー家族の延長として、意識の遠いグローバルなロータリーは消失するということになりましょう。脊椎動物はたいてい家族を作りますが、食べ物を中心にして家族意識をもって食事するのは人間だけです。

:決議23-34の冒頭に「ロータリーは人生哲学 利己的な欲求と他人への奉仕という矛盾を心の葛藤を通じて調和する」と記載があります。

身近なロータリーも大事ですが、また別な意味でグローバルの奉仕の夢も大切だということも承知しています。職業で利潤を追求する前に、世のため人のためになるような行動を先行考慮する職業奉仕がロータリーの命ですが、現在の感覚からしますと、第一義的には行過ぎた市場原理主義を職業奉仕としてロータリーがコントロールすることが大切ではないかと考えています。RIのあまりの増強・拡大主義をみていると、クラブ奉仕、職業奉仕第一主義に戻りたくなる衝動にかられます。

人間の叡智で覇権主義の争いをやめ、国際協調、共生による楽しい世の中を作りたいものです。これも他を殺しても優位に立とうという人間本来の欲求をコントロールして、世の中、仲良くということが、ロータリーの国際奉仕の条項、世界社会奉仕（WCS）



も含めてすべて国際共生の概念に合致しています。

私どもが個人的に比較的簡易に「楽しいねー」と感じられるものに国際友情交換があります。RIは財団事業との関連が薄いので、これを宣伝しませんが、個人的に外国人家族とつきあうのは楽しいものです。私が新潟クラブで経験した楽しい友情交換を列挙してみます。周年行事に姉妹クラブを招待したものは除きます。

- ① 姉妹クラブ香港島東クラブの周年行事参加〔私の会長年度〕
- ② スコットランド・エジンバラの世界大会にクラブの皆さん十数人と夫人同伴で参加、途中イングランド西部の景勝地チップングカムデン村のロータリークラブの例会に全員参加したこと。〔私の会長年度〕
- ③ 私がガバナーノミニーになった秋、私が余りにロータリーのことを知らないものですから、地区幹事をお願いした小山樞夫さんからの「アメリカのロータリーの地区運営をみてきませんか」という誘いによって、小木順一郎さんと三人で5100地区オレゴン州ポートランドでロータリアンの家に三日間民宿して、歓待を受け、ロータリーの本質を彼の地のガバナーたちから直接教育を受けました。
- ④ ガバナーエレクトの年、アナハイムでの国際協議会に参加して、外国の地区GEと夫人らと話あい交流するのも楽しいものです。またアナハイムの近くのクラブがGEを招待してくれたのも楽しいものでした。数年たった今でも、「あのときは楽しかったね」と懐かしんでいます。ロータリーに属している楽しさの一つに、外国の人たちとの交流があります。この楽しさを楽しむにはありません。
- ⑤ 各地の世界大会に参加したこと。

今ロータリーでは、数と量の増大をめざして、地区やクラブ同志の競い合いをやっていきます。そうい

うものを外れて、個人からの心からの奉仕を尊重すべき時代に入ったと思います。経済・成果至上主義から脱して、江戸時代の町人がお金がなくても、九尺二間の長屋に生活していても、にこやかに満ち足り、笑い上戸で、好奇心に満ち溢れた共生の生活に私どもは回帰すべきときがきているのかもしれませんが。それを新グローバリズムというのもしおこがましてのですが、「21世紀を江戸時代に」という私のささやかな願いをロータリーにも及ぼしたいという願望をご理解いただきたいと思います。

もう少しPersonalのロータリーを考え、もっとクラブ奉仕の活動を活性化して、奉仕もRIのためでなく、奉仕の結果も大事ですが、奉仕をすることによって自分の心が洗われ、自己の人間形成に役立つという視点を強調すべきときがきています。ロータリーとは最終的には自分のためという概念、I serveということが大切と考えます。

他の奉仕団体が、大勢で奉仕して、実をあげているのはWe serveの奉仕というのです。

その意味では各自のクラブの雰囲気にとっぷりと漬かって、毎週のロータリーは楽しい楽しいといって身近の奉仕に精を出しているロータリー温泉会員がロータリーでは一番大切だと思っています。

ご存じ修道女マザー・テレサは、ノーベル平和賞をうけましたが、カルカッタの街頭で見捨てられ、死に瀕している人たちに、「あなたは決して孤独ではありません。こんな風に手を握ってそばにいる人もいるのですよ」と愛を伝えたといひます。

もっと大掛かりの活動をしてはどうですかと言われると「愛を伝えるには、一人の個人として相手に接しなければなりません。大勢では数の中に道を失います。一人ひとりの触れ合いこそがなによりも大事なのです」と答えたといひます。

また「私は決して助けた人を数えたりはしません。ただ一人、一人、そしてまた一人」なのですと答えたといひます。

ロータリーの奉仕が量や数ではなく、I willであることをじっとお考えいただきたいと思います。

次週例会 2月4日

「世界理解月間」

国際奉仕委員長 佐野勝榮 会員

次々週例会 2月11日

祝日（建国記念の日） クラブ休会

